



国土と言葉

五

本多弘之

honda hiroyuki

願心が国土を生みだし、その国土の功德を自己の名告りを通して衆生に与えようとする。法蔵菩薩の選択本願はそういう筋道で、衆生の平等の救済を語りかけている。しかし、その構造をもう一度、願心そのものの視座から見直すことはできないか。願心が国土となつて衆生の平等の存在の基底になろうとし、時間空間を超えて、いつでもどこでも衆生の救

済の根底にあり続けよう、ということ。それにもかかわらず、衆生の側は自分の迷妄の意識とその自己理解からは、如来の願心に一向に出遇えない。その意味では、迷没する衆生の論理に対しては、全くの「他」としてしか関係を語り得ないのが、「願心」の物語の本質なのである。その他との関係を、自己を全面的に他に施与して、他の中に自己の願心の

根を張ろうという、こういう願心の自己回施を「願力の回向」として、選択本願の本質であると了解したのが、親鸞の『教行信証』構想だったのではないか。

利他の願心が、本願力回向という形で、苦悩の衆生の宿業の源底に徹入していこうとする。国土と言葉は、この願心の自己表現なのである。しかし、国土は、衆生の生存の依所

として、意識経験に先立って、存在の根源に与えられているものである。身体が与えられるときに、同時に国土が与えられている。この国土は広い意味の環境といえる。

唯識思想では阿頼耶識について、その相分は、「不可知の執受と処」であるとされるがこの処が、今いうところの国土、つまり広義の環境に当たる。不可知の執受とは、有根身と種子であるといわれている。有根身つまり感覚機能等具备了た身体である。種子とは、それに与えられている生命力とでもいうべき生存の可能性である。

この人間としての生存の可能性たる種子に、「名言習気・有支習気・我執習気」があるとされる。有支習気とは、業の熏習であろう。それぞれの生存を他と異なってそこに与えてくる因縁、それを不共業ともいう。他と共通でない過去の業因ということである。それによって個々の実存には他に取り替えのきかない独自の存在たる事実が与えられてくる。それは比較や意味づけによって、少しも増減しない存在の独自の尊さでもある。それがまたその本人の逃げることでできない実存的な苦境をもたらす宿業因縁でもあるのである。

我執習気は、その変更不可能な自己を、無始以来、自我意識で執着してきた我執の熏習である。我執の根柢は我執の経験の歴史にある。それ以外に根柢があるわけではない、と

いうことである。

これらはそれぞれ問題を孕んでいるのであるが、今は、「名言習気」を手がかりとして考えてみたい。名言とは、言語の一切の経験を包むものである。その経験の蓄積を「名言熏習」というのであろうが、そこに「顕境名言」と「表義名言」ということをいう。意識の対象となる「もの」や事実の名づけられた言葉を「顕境」の名言という。それに対して、意識の対象として特定されるような「もの」とか「作用」とか、何か特定の「こと」がら」とかではない、人間の意識が見出す「意味」をあらわす言葉、これを「表義名言」という。

八木誠一さんは『Bible』第十五号で、言葉には記述言語と表現言語があつて、宗教の言葉は「表現言語」であるといわれている。この表現言語ということが、唯識の表義名言に近いようにおもう。意識内面の問題を表現する言葉を、われわれは存在の根に与えられているということである。

法蔵願心の語る「国土」は、顕境名言としての外在的環境をあらわすものではない。八木さんのいわれる記述言語としての、国ではない。いうならば、表義名言の中の意味として、「国土」を語りかけようというのである。

ここに、誤解が生ずるのは、「処」としての場のごとくに、願心が国土を建立すると語る

ので、これを顕境名言の国だと思ってしまうからである。それに対して、表義名言としての国とは、有情たる存在にとつての根源的な故郷ということではなからうか。迷妄を翻転して清浄なる大悲の願心に帰りうるなら、共業としての生命存在を超え、個人を成り立たせる不共業をも超えて、宿業の根源に平等の大地としての法性があることを、存在の依所のごとくに語りかけるのである。そこに触れるとき、名言習気に無始以来熏習された言葉の源泉に、願心の国土は「既にこの道あり」といわれるような、衆生を根源から撰取する無限なる光明のはたらきがあるというのである。

その国土を主宰する主体の名告りが、如来の名である。名は国土を統治する力を表すと共に、国土の土徳をそれに触れてくる衆生に与え続けるはたらきをもする。名が用いられる。その用きとなった名告りこそ、衆生の名言習気に熏習し続けることができる。それを願力回向というのであろう。国土の建立と、主宰する主体の名告りとは、共に衆生への救済意思の表現であるのだが、国土から名への間に、ひとつの飛躍を見る。それが、『教行信証』の本願観の特徴なのではないか、と思う。

(ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長)